View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

芸術観光学の理論と実践 7 梶山千鶴子『國境』論：海外旅行自由化と「重層次元革命」

著者	平居 謙
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	15
ページ	9-18
発行年	2015-07-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001316/

芸術観光学の理論と実践⑦

梶山千鶴子『國境』論

― 海外旅行自由化と「重層次元革命」―

平居　　謙

要　旨

梶山千鶴子の第一句集『國境』（1972年）は、それ以前には例をみない数の海外詠が含まれている。海外詠が国内詠と絡み合わせて句集中に提示されることにより、題材面において従来の「日常」⇔「非日常」という「重層性」の2項対立の図式がより複雑化した。この点で『國境』は題材面における「重層次元革命」とでも言うべき変革を成し遂げた、俳句史上重要な役割を有する句集であるといえる。そしてこれは「的確な伝統性の保持」「景物および主題が劇的に異なる海外詠の大量掲載」「明確な排列意識による国内詠との対比・融合」等の梶山自身の俳句に関する資質に加え、彼女の経済的裕福さ、海外旅行の自由化というさまざまな条件が重なって成立したものである。

はじめに

句集において「旅」とは何か。

日常的生活圏から離れ、訪れた土地に身を委ねることで新しいものが見えてくることが多い。また気分が高揚し、斬新な表現に繋がることも少なくない。この意味で俳句を作る人々の中では吟行に赴くということが一般的に行われてきた。その結果「句集」には、日常の場面でなされた作と、旅先という「非日常」の土地で作られた句との両者が共存することになる。「句集」は「日常」と「非日常」というふたつの側面を含み込んだ「重層」空間なのである。そして句集にとって「旅」とは、その「重層性」を確保する重要な装置であると言える。「旅」は多くの書き手にとって「国内旅行」に他ならなかったのだが、1964年に海外旅行が自由化[1]されるや「もう一次元上」の「非日常」を取り込む扉が万人に開かれたことになる。もっとも可能性として開かれただけで実際に最新の「非日常」に触れる幸運を持った者はそれほど多くはいなかったのだが、そのような中で、いち早く梶山千鶴子は世界の各地を巡り、1966年から71年までの作品を収めた第一句集『國境』[2]（72年）を上梓する。海外詠[3]としては現在、加藤楸邨『死の塔』（73年）や、夏石番矢『地球巡礼』（98年）、また1969年アメリカ旅行で書かれた句群を収めた鷹羽狩行句集『翼灯集』（2001年　角川書店刊）など知られているが、梶山の句集はそれよりも時期的には随分早く刊行されている。

海外詠が句集に登場すると、それまで「非日常」の最たるものであった国内旅行が一段格落ちした形となり、頂点に海外旅行が君臨することになる。題材レヴェルにおいて「日常⇔非日常の図式」に変化がもたらされる。現在では、各国の環境や生活様式が均一化されつつある。私たちの持つ情報量もインターネット等の普及により著しく増加している。そのため異文化からの刺激自体、珍しいものではない。しかし、海外に関する体験や情報自体が貴重な時代においては、それらの重みは現在とは全く異なるものであった。海外旅行という一見外面的にも思われる題材上の変化が、俳句の「重層性」を根本的に変革したわけである。すなわち従来の生活圏と旅行（国内）という2項対立の図式がより複雑化し、生活圏、国内旅行、海外旅行という「非日常性」のヒエラルキーが出現する。本稿ではこれを、「重層表現」の次元が根本的に変化するという意味で「重層次元革命」と称する。そしてこの「重層

次元革命」を最も早い時期に具体化している句集が梶山千鶴子『國境』であるということができる。

海外旅行自由化以前……生活圏…日常性　　国内旅行…非日常

海外旅行自由化以降……生活圏…日常性　　国内旅行…低次の非日常　　海外旅行…非日常

梶山の真骨頂は、単純に海外詠が存在するという点に留まらず、その句がそれまでの日本の俳句世界には見られない表現領域を開拓してゆくところにある。海外詠によって俳句の表現領域が開拓されるという時、それは単に海外の風景が描かれるという表面的なことを指すのではない。日本にいる限りにおいては実感を伴って感じることの難しい問題が、目の前の光景を通して自ずから体感され、言語化されてゆくということを意味する。先回りして言うならば、例えば本書のタイトルでもある「國境」の問題は日本に生活する限りにおいては切実に関わってくることのない問題であり、海外に出てはじめて実感しえる問題である。このような問題を含みえる器として俳句そのものの領域が拡大するという点で意義が生じる。

また海外詠として孤立してしまうのではなく、従来の俳句世界の中に融合し「重層世界」を形成するところにまで至っている点にも注目すべきである。前掲の鷹羽狩行句集『翼灯集』は590句もの海外詠が所狭しと並べられている。しかし『國境』に特徴的なのはこのような力技ではない。読者は、静かに佇む和風建築にも似た俳句の風景の中に灼熱世界の動物や食物が突然現れることに感動する。或いは日本では実感することの出来ない歓喜のシーンや哀愁の感覚が句集に滲み出ているのを知る。従って海外詠以外の俳句が的確に日本の伝統的景物を写生していない限り、この対比は成立しない。

梶山の第一句集『國境』において重要な一歩が踏み出された「海外詠による重層表現革命」は、以下の３つの条件を満たして成立したものである。

①梶山的確な伝統性の保持　　②景物および主題が劇的に異なる海外詠の大量掲載

③明確な排列意識による「国内詠」との対比・融合

もちろんこれらの梶山自身の俳句に関する資質に加え、彼女の経済的裕福さ、海外旅行の自由化という条件が重なったことは言うまでもない。その後、梶山の句集に海外詠が色濃く現れることはないが、それは梶山がいち早くこの「重層表現革命」の「一過性たること」を意識したためであろう。逆に言えば海外旅行が自由化された直後に絶妙のタイミングでこの革命が行われたことになる。

本稿では、この梶山の「重層性」を、海外詠を核としながら分析するが、その前提として彼女の俳句との出会いと第一句集『國境』の成立、そしてその後の生涯に関して概観する。

１　梶山千鶴子と第一句集『國境』

本節では『梶山千鶴子全句集』[3]の巻末に付された「略年譜」を基に、本節では彼女の第一句集『國境』出版までを中心に、生涯を概観する。

梶山千鶴子は1925年京都市上京区に生まれた。1939年で京都府立第二高等女学校入学、「親鸞上人と歎異抄」を書き44年、高等科を19歳で卒業した。46年帰還将校梶山登と結婚し、57年には梶山木材店を設立している。62年に丸山海道主宰の「京鹿子」に入会、その後フランス文学者で芥川賞受賞作家でもある多田裕計主宰の「れもん」に入会した。彼は神奈川県逗子市在住であった。新幹線で上京し帝国ホテルに宿泊して句会に参加し「君は代議士のようだ」と師にからかわれた。彼女の豊かな経済力を窺い知ることができる。吟行にも驚くほど積極的に参加している。

折りしも1964年４月、外貨持ち出し枠の制限付きで海外旅行が自由化された。梶山は早くも66年に平安博物館のグループと共に韓国に旅行している。67年台湾、68年にはグアム・サイパン・メキシコ・アメリカと海外旅行に頻繁に出かけ、69年れもん社から出版された合同句集『めろん集』にも参加する。70年２月にはアメリカ西海岸20日間の旅行、10月には香港・マカオを商売関係の人達と訪れ、多くの海外詠をなした。71年には俳人協会会員となり、翌72年第１句集『國境』を出版し

た。78年に第2句集『濤の花』を上梓する。80年には多田裕計が死去した。85年8月に第3句集『一の矢』を上梓したが11月には夫登を失った。88年8月に主宰誌「きりん」を創刊している。

平成に入っても創作意欲は衰えず、第4句集『鬼は外』（90年）第5句集『一人芝居』（96年）第6句集『結』（99年）第7句集『墨流し』（06年）と4冊の句集を刊行した。72歳になった1997年からは、1泊2日の「きりん」鍛錬会を10年間継続するなど、精力的に活動を展開している。その後も『牛歩』（09年）等の合同句集に参加するなど、晩年まで後進の指導にも熱く当たった。

梶山は句中で自ら「生涯を古都に住まひて屠蘇を酌む」「生涯を古都から出でずに桃啜る」というように、国内外多くの旅に出向いたが、生涯生活の基盤としては京都を離れることがなかった[4)]。

2　鶴一羽 ― 韓国の海外詠

句集『國境』は、「遅ざくら」（65年）「鶴一羽」（66年）「ザボン売り」（67年）「メヒコの国」（68年）「北の馬」（69年）「鮭切身」（70年）「出雲の雪」（71年）の年代ごと7部に分けて掲載されている。海外詠が収められているのは2番目の部「鶴一羽」からで、そこには第1句の直前頭から1文字下げ小さなポイントで「韓国　七句」（鍵括弧表記はなし）の前書きがある。実際には1段で掲載されているが本稿ではスペースの関係で2段で引用する。掲載の順番は左→右、次行左→右の順であり、原文は縦書きによって表記されている（以下同様）。

韓国　七句

鶴一羽あゆみ國境の雪散らす　　春星に瞑想ふかき火田民
農民や国土いとしみ雪を掘る　　水売りの足より昏れて春浅し
冬ざれてパゴダの裾に人ら飢ゆ　　國境の氷柱太りしまま昏るる
鵲とぶ非武装地帯雪明り

第1句には国境線の問題が含まれている。日本にいても同一民族分断の悲哀は観念的には理解が可能である。しかし、「国境線の上を飛んでゆく鶴」という具体的な形象に至ることは困難である[5)]。前掲の全集略年譜　昭和四十年の項（1965五年）には以下のような記述がある。＜一月、平安博物館の某グループの人達と初めての韓国旅行（十数名の一行のほとんどが男性だった）。この旅行の途中、板門店に立ち寄り、第一句集『國境』の句集名となった「鶴一羽あゆみ國境の雪散らす」を作句。人間は三十八度線を越えることはできないが、鶴はそんなことに捉われない。梶山さんは国境を越えて雪を蹴散らす鶴の勇気に感動したのだ。まるで自分を見るようは鶴の行動を、そのまま十七文字にまとめる無造作な技法が千鶴子俳句の魅力の一つである。＞筆者（平居）としては、「鶴と自分とを重ねた」「無造作な技法」等の読み方には共感できないが、国境線を難なく越える鶴に強い感銘をうけたであろうことは想像に難くない。

続く句群中の「火田民」[6)]は焼畑農業の農民たちのことを指し示している。朝鮮半島の困窮する経済状況の象徴として読むことができる。パゴダは一般的には「仏塔」の意であるが、朝鮮半島独立運動発祥の地は「パゴダ公園」と呼ばれている。韓国句群は暮らしに行き詰まる中、声を潜めたような静けさに貫かれている。行く末を案じ生活苦に立ち尽くす農民たち、耕しても一向に上向かない収穫量、貧しい土、といったものを淡々と描き出すことで却って批評精神が立ち昇る。戦後の混乱から抜け出し高度経済成長期になった日本では「パゴダの裾に人ら飢ゆ」といった光景は薄れつつあった。海外での光景は、そのような問題を改めて照射する力[7)]を有していた。

「街騒やガラスのごとく木の芽立つ」という鋭く新鮮な感性と語彙によって開始されたこの句集の第2部に、息の詰まる韓国の昏さが描かれていることには注目すべきである。というのも本稿でこれ

から読み進めるように、この句集は稀に見るカラフルでエネルギッシュな表現で満ちている。それだけにこのような深刻な句群の存在による抑えが、対比として極めて有効に働くことになるからである。

上記の「韓国　七句」に続いて現れるのは、以下の10句である。前書きもなく「韓国　七句」の最後の句にそのまま繋がる形で掲載されているので、どこまでが韓国の句でどこからが帰国後のものかは一見区別がつかない。しかし読み進めてゆくうちに、これらが半ば意識的になされた「重層表現」への試みであることが理解されてくる。つまりは、最初の「雪速し」の句があることで「韓国　七句」の最後の「雪明り」と「日本の雪」とが自然に対比される。韓国庶民の生活苦への共感が「肩まげて」雪を避け行く日本の「働らく者」への共感として帰国後形象化されるのである。

雪速し働らく者ら肩まげて　　裸木囲む天守へのぼる若者ら
絵馬古りて明るき天に松の芯　　走り梅雨身ぢかき幸を忘れがち
梅雨川の微光や老いて網を打つ　　尾のない猫愛し睡蓮風に浮く
葡萄色の十月の海婚きまる　　柚子一つ地へ落ち古き村ばなし
初しぐれ旅はをとこを饒舌に　　笹鳴りを陣屋の壁の窓に聞く

もっとも、その後続く句の中には、「天守へのぼる若者」「明るき天」「婚きまる」「旅で饒舌になる男」などが現れ、日本の明るさが韓国の昏さと対比される。梅雨に閉じ込められ暗澹たる気持ちになった時却って「身ぢかき幸」の存在に気付く。韓国の抱えるさまざまな深刻な問題から照射され、自分自身の住む日本の豊かさを再認識する。「鶴一羽」は、本節で引用した作品が全てであり、前半に韓国での句が、後半には帰国後の句が並べられる点に排列意識[8]見て取れる。それによって韓国の人々の生活の苦しさと、日本の若者たちの持つ希望とが、極めてシンプルな形で対比されてゆく。

6句目「尾のない猫」を「韓国　七句」で提示された問題意識で読み解くならば、さらに深みのあるものとして感じられる。梶山は韓国を訪れて、そこに経済的基盤の欠落・国家的安寧の不在等いくつもの「失われた尾」を目の当たりにする。しかし先述のようにそのような現実を単に他人事と突き放すのではなく、「日本の雪」と繋ぐ。欠落した状態のものでさえ、あるいはそれだからこそ愛おしむ態度がそこにある。柚子が地に落ちるという、何かが失われることによって「村ばなし」＝村の昔からの伝説・歴史、が紐解かれる。自らが見た旅先でのほんの一場面がその認識に新たな主題を加え得ることは、まさに韓国旅行の体験から改めて得られたものに他ならない。

鬱々とした韓国の情景から始まるこの部はしかし、まだその到来はないけれども春の近いことを思わせる若い鶯のぎこちない囀り「笹鳴き」の表現を以って閉じる。深刻な主題を何とか「生」の方向に転換させようという梶山の熱情を感じさせる。「鶴一羽」の特徴的構成を以下にまとめておく。

①韓国の風土の昏さの認識（前半）
②その中で生きる庶民への共感（前半）
③韓国と比較した自身・日本の幸福の実感（後半）
④明るい春を待ち望む期待感（後半）

梶山の韓国詠では、当時の日本とは比較しようのないほど苦しい韓国の人々の現実を浮き彫りにする。しかしそれらの句群は何の区切りもなく日本の生活を詠った句群に繋がってゆく。二つの句群から感じる読後感の落差が、句集のダイナミックな魅力の１つとなっている。そしてそれは俳句という器自体が「拡大」「成長」するプロセスを指し示しているとも考えることができる。

この第２部「鶴一羽」に見られる如き＜落差を示す構造＞は、第一句集『國境』の多くの部に共通して存在し、それによって『國境』全体、ひいては梶山千鶴子全句業の大きな特徴ともなっている。以下、「ザボン売り」「メヒコの国」「鮭切身」部にみられる同様の構造について分析を続ける。

3　ザボン売り ― 台湾

句集第3部「ザボン売り」(1967年）は、同年2月に訪れた台湾での作品が13句収められている。前年の部に収められている韓国句と異なり、作句の地名等の前書きなしで置かれる句（以下本稿では「前書きなし」と称する）と「安宅関跡　二句」と註の付された計4句のあとに台湾句が配置される。最初の4句が台湾句への露払いのような役割を演じている。春を待つ期待感と寒さによる閉塞感の交錯する「ザボン売り」冒頭4句を経て、爆発的に明るい彩を有する「台湾十三句」が満を持して展開する形をとる。本句集の本領がいよいよ発揮される。

台湾十三句

旅にして青椰子の間に波ひかる
潮遠し乳房めきてマンゴ熟れ
蕃族の青嶺をくずす発破音
朝粥のうまき中国明易し
蛇使ふ眼や台北の夜風濃し
煮えたぎる獣肉雨季の街にじむ
黍の葉の葉ずれもかろく旅移る
火炎樹や裸足の子らが島を駆け
水牛と歩合はせ炎天雲もなし
孔子廟飛機影よぎりつつじ咲く
爆竹の路地よりはじけ街暑し
島みどり夜の食卓にマンゴ溢れ
夜に入りて涼しき灯影パパイヤ食ぶ

ここにある大半の句が開放的な感覚を歌い上げる。熱帯の気候の中、身も心も弾ける旅人の心情を読み取ることが可能である。当時珍しかったマンゴやパパイヤなどの派手な緑・黄といった色彩や青嶺、島や黍の緑、また文字通り燃えあがる火のような火炎樹の赤、炎天など鮮明な印象を与える語句が続く。さらには煮えたぎる獣肉、発破の音、爆竹の響きなど、日本文化の中では頻繁に触れることのない風物が描き出される。これらの語彙の集積から、活気に溢れた灼熱の国の歓楽が伝わってくる。唯一、「蕃族の…」句には台湾に見られる少数民族の問題、乱開発への危惧といった、いまや漸く一般化した社会問題への萌芽を早くも伺い知ることが出来る。同じ破裂音であってもこの句の三句後に置かれた「爆竹の路地」の句における爆竹の開放音との差は歴然としたものがある。このように、韓国句と同様、民族独自の昏い側面に掠りつつも「台湾　十三句」は総体として開放感溢れるトーンを以って「かろく旅移る」のである。

その後作品は舞台を「播磨　二句」「天草　三句」のように日本国内に移してゆくが、そこにも「みかん熟れ」「ザボン売り」という語が見られる。これは第二部の「鶴一羽」の前半から後半に至る際に「雪」をキーワードとしてなだらかな舞台移動が行われたことと同様、海外の余韻を国内に持ち込む排列手法であると考えることができる。マンゴ・パパイヤ・爆竹等によって派手に演出される「台湾　十三句」との通奏低音を引き継ぐ形で展開する。続く「逗子鎌倉　五句」には派手な色彩の果物こそ見られないが、「陽炎」「烈日」のごとく煌びやかな太陽の光が取り入れられている。「前書きなし」の2句を挟んで「能登　八句」も「夏日ころびて海へ落つ」「卯の花をこぼす」「海女の島禁男の砂」「朝日さす」のように鮮明で刺激的な語句が頻出する。その一方で「昼も暗」い「舟宿」が出てきたり、濤の高い日が続いて「海女の唇かわく」というエロティックにして暗鬱たる表現もみられたりする。また、「青柳に隠れて能登の一家系」の如き、隠然と静かな生を暮らす北陸の秘められた家族の句は「暗い日本海側」というイメージと容易に融合し、「能登　八句」の中で展開する独自の明るい能登のイメージを却って際立たせる。続く北海道に関する「北海道　十七句」も、厳冬の北海道ではなく、晴れやかな空の大地を想起させる爽快な作品が多い。特にその中でも秀逸2句は「乳牛の乳房湿地の百合に触れ」「痩老婆きらめく毛蟹ぶらさげて」である。前者は乳牛の大きな乳房が可憐な百合の花に触れる瞬間の極小のエロティシズムを核とした、ユーモラスでリアルな作品に見事

なまでに仕上がっている。後者は、老婆と蟹のツーショットの瞬間を捉え対比・相似の両面から楽しめる優れた作品である。ところどころに囚人道・獄・囚人道路の語があり、ややもすれば旅の歓喜に浮き足立つ句群全体を引き締める役目を果たしているともいえる。しかしこれらの作品に関していえば、見物者的の目線が前面に出ており、それほどの深刻さを感じさせるわけではない。

北海道句群も総じて明るい句が多く、その次へのつなぎには、自宅のある京都の大文字送り火の頃を題材とした句が置かれているが、そこに「メロン」の語が見られるのは、本稿ですでに繰り返し述べた「ある土地の余韻を次の句群へと繋ぐ方法」であり、これらが国内旅行での句群の場合にも用いられている場合があることをここに確認することができる。

その後「三方五湖　三句」「東京二句」「東北七句」「清水焼陶房　一句」というように句の舞台は移り変わってゆく。その中で読者は、この「ザボン売り」の冒頭近くに「台湾　十三句」があったことを、もう遠い記憶のように感じるかもしれない。それはあたかも、まだ一年も経たない旅の記憶が、時には何年も前のことのように思われてしまうことの錯覚にも似た不思議な感覚を誘発する心憎い装置である。このいわば「フェイドアウト」にはしかし、本句集最大のヤマ場である「メヒコの国」をより際立たせるための緩急をつける、という意味も含まれているのである。

4　メヒコの国 ― グアム・サイパン、メキシコ、ワシントン、カナダ、ハワイ

第4部「メヒコの国」（1968年）には本節で見てゆくように、深い郷愁の悲しみを帯びた思いと、煌びやかな灼熱の島の形象が交錯する部である。「グアム、サイパン　十七句」の前に1句だけ「前書きなし」の「マシマロのような日が昏れ三日過ぐ」という句が置かれているが、この句の持つ意味は極めて大きい。「マシマロのような日」とは一体何の喩であるのか。夕映えの中に奇妙に白く大きな夕日が沈んでゆく様子を映像などで見ることがあるが、そのような光り輝く光景ではない。むしろ不気味で淋しいものを想起させる。グアム、サイパン句群を読み勧めてゆく時、半分以上の句から「島に残された日本兵」の息吹を感じ取れる。それを知った上でもう一度マシマロの句を読めば、それはかつての玉砕の地から自らにつながる者たちを迎えにきた魂の白い塊のように読むことができる。「夜が明けてまず飛ぶ熱帯の蝶」を描いた4句目にも同様の切なさが感じられる。また「密林の」「南海の」「椰子風に」「青蜥蜴」「玉砕の」（2句）「片翼の翳り」の8句にも明確に読み取ることができる。そこには眩しすぎる太陽の下、痛々しい戦争の傷跡を目の当たりにする当惑が描かれている。同じサイパンに舞台を取って書かれた石垣りんの詩「崖」[9]を想起させる。最後の句はそれでも、兵が果てた「土」を「みづみづし」と敢えて言い切る。ここには眼前の現実を受け入れる強い梶山の意思が感じられる。

グアム、サイパン　十七句

灼熱の島も夜風の十字星
基地夜明けまづ熱帯の蝶飛べり
熱風に浮きかぎろへる無人島
南海の潮騒月に軍歌めく
バナナ売るスペイン砦風棲みて
青蜥蜴兵らの果てし崖きり立つ
玉砕の崖へ西日のずり落ちる
産み歩く野生の鶏に炎日昏れ
青バナナ兵果てし土みづみづし
乳房まで灼け熱島の女肥ゆ
密林のスコール兵ら哭（がごと）く
夜も暑き島の灯銀河とまぎれ見ゆ
椰子むらの戦後跡蝸牛の道ひかる
熱島に兵の息吹か草いきれ
椰子風に漁村はひくく青入江
玉砕の断崖高し白朝顔
片翼の翳りサイパン大西日

「グアム、サイパン　十七句」の後には「馬籠　三句」という、いかにも日本の伝統的家屋の雰囲気を漂わせる宿場町へと舞台を移してゆく。続く「高山祭」にも「吉野」にも同様のことが言えるだろう。「前書きなしの句」や「愛猫マン」の句などがあり、「身延山」「化野」「岩清水八幡宮」を題材とした句が続いている。このような「海外詠⇔国内俳句」の混交による構成により、日常と非日常が複雑に絡み合う「重層効果」が際立った形で現れていることは既に繰り返し述べたところである。

第4部「メヒコの国」後半には、表題作の「メヒコの国　十九句」も収められている。「グアム、サイパン　十七句」の煌きにも似た灼熱の悦びに誘う句群がそこにある。「火炎樹の」「国華てふ」「碧天の」の3句が特に優れた作品である。「グアム、サイパン」句群のような悲哀を含む「往きだけの」「緋カンナ寂と」「闘ひて」「牛の屍を」のような作品も含まれてはいるが、玉砕した日本兵の記憶が詠われる「グアム、サイパン」句群の息苦しさと比較する時、深刻さにおいては若干淡いものがある。

メヒコの国　十九句

聖火燃ゆ炎雲へ発つ鷲のごとく　　夜間飛行すでにメヒコの月ならん
火炎樹の火色うばひて聖火過ぐ　　聖火ランナー駈く日輪を髪に曳き
炎天や選手の孤影いよよ濃し　　太陽のたしかさ強き青メヒコ
国華てふダリア混血の色もてる　　碧天のマンゴ埃のまま熟るる
太陽の炎にからむ闘牛士　　往きだけの扉か闘牛に大西日
緋カンナ寂と闘牛いま危し　　闘ひて果てし雄牛に日陰欲し
牛の屍を馬牽きダリアの風は黄に　　カテドラの蟻に遅れじ膝行女
星かわく闇の深さにピラミッド　　夜はすずし星座を放つピラミッド
西班牙の王霊に会はん月の戸磴

この句群に直結する「ワシントン」と小さく付された「黒人街窓閉ざされてダリア咲く」の句は、海外詠同士に関しても「余韻」を次句に伝える方法が同様に採用されていることを示している。もっとも、「ワシントン」の地名で前句群と明確に分けられるため、「余韻」の効果は著しく減じている。

続く「カナダ」と付された「胸厚き男あるくやナイヤガア」の句は秀逸である。ナイヤガラの滝の大きさについて何も言わずとも、前半の「胸厚き男」という表現が見事に轟音を立てて聳えるナイヤガラの滝のイメージを語っているのである。このように、「ワシントン」「カナダ」と一句ずつ異なる地名が現れた後、「ハワイ」の前書きつきで、「火炎樹の木の間に真珠湾晴るる」という句が現れる。「真珠湾」の語は、「グアム、サイパン」句群において提出された玉砕日本兵の問題を蒸し返すに充分な地名である。この第4部「メヒコの国」は、爆発的に明るい表現と深刻さとの鬩ぎあう、奇妙に複雑な部の構成になっている。第4部はこの句を以って終了している。

5　鮭切身 ── サンフランシスコ・グランドキャニオン・香港

第5部「北の馬」（1969年）と第七部「出雲の雪」（1971年）には海外詠は存在せず[10]、その間の第六部「鮭切身」（1970年）のみに「サンフランシスコ　五句」「グランドキャニオン　一句」「香港　四句」が見られる。第6部「鮭切身」における海外詠は、それまでの爆発的な海外詠の描写と比すると、描かれる場所の特徴もあって全体に落ち着きを以って描かれている。ちなみに、「鮭切身」部の海外詠は、「前書きなし」の冒頭三句のあと「サンフランシスコ」「グランドキャニオン」の順で置かれ、その後「貴船　二句」「丸山芭蕉堂　一句」「室生寺　二句」「長谷寺牡丹　八句」「詩仙堂　二句」「山梨　四句」「鞍馬　一句」「信州　二句」「大阪茨木耶蘇村　一句」「東北三大祭の旅　十一句」「石山吟行　七句」そして海外詠の「香港　四句」を挟んで「明日香村　八句」「泉岳寺　一句」「金沢　六

句」である。

サンフランシスコ　五句

パンを食む漁夫の半身春夕焼　　春惜しむ漁夫や波止場の白ペンキ
青椰子を雄獅子のごとく風が擲つ　　半旗かかぐ町すじ直に桜咲き
夕焼いま金門橋をわたり来る

グランドキャニオン　一句

島去りて大岩壁に春の雷

香港　四句

川澄みて國境の魚さとし　　中国の川は土いろ柳ちる
支那街の灯影に白き菊うかぶ　　良夜たり蚤民の子が舟鳴らす

「香港　四句」にもこの句集のタイトルである「國境」の語が再び現れる。多田裕計は句集冒頭に置かれた「賛」において「梶山千鶴子さんの俳句は、知性と感性との緊張した結晶である。その資質は、カットグラスのように、明快である、簡潔である。健康である。女流俳人としては、特色ある現代的才能と云うべきだろう。」と述べた。カットグラス、水晶の語を多田に書かせたもの、それはこの句集の第一句「街騒やガラスのごとく木の芽立つ」であり、もう一つは、「月光の水晶砕き川神輿」であったろう。あまりにも的確に呼応する最初と最後の二つの句。梶山千鶴子第一句集『國境』はこの「月光の」の句を以って幕を下ろした。

おわりに

本稿では海外詠に注目し、梶山千鶴子第一句集『國境』の構造について論じた。梶山は2013年4月、89歳で没している。その年の秋、主宰グループ「きりん」に参加することになった筆者平居にとって一歩の差ですれ違った幻の師であり、それだけに引き寄せられるように本書の魅力の解析に挑んだ。彼女は本稿で既述の通り、その後殊更に海外詠に重きを置くことはなかったが、第1句集『國境』においてこれまでになかった海外詠と国内詠との混合によって、句集の新たなあり方を提示した点に関しては忘れてはならない。

註

1) **海外旅行自由化**　観光目的の海外旅行が一般に広がりはじめるのは、1964年の海外旅行の自由化を経て、ジャンボジェット機の就航や国際便の増加による大規模輸送が本格化した1970年以降のことである。そして1960年代までの日本における「海外」とは、戦前から明治期、さらには前近代へと遡ることができる、日本の「海外」の長い歴史と地続きのものだったと考えられる。つまり海外旅行という視点から見れば、1960年代と70年代の間に一つの、そして大きな転換点がある。（山口誠「米領グアム島にみる日本人観光の特性とその歴史性」2010年3月関西大学経済・政治研究所「調査と資料」第107号現代産業社会と人間関係研究班『現代社会における人間関係とリスク』所収）

2) **『梶山千鶴子全句集』**　2013年2月　東京四季出版刊

3) **海外詠**　俳句が海外で読まれることは以前にも存在した。1910年代以降朝鮮半島では俳句活動が本格化しているし、高浜虚子も熱帯経由で渡欧する際、船上句会を行っている。また第二次世界大戦の戦地俳句なども

知られている。中根隆行「朝鮮詠の俳域 ― 朴魯植から村上杏史へ」（日本近代文学会関西支部編『海を越えた文学 ― 日韓を軸として』2010年　和泉書院刊）/松井貴子「ハワイ俳句のためのノート」（外国文学(59)，75-84，2010年　宇都宮大学外国文学研究会）等参照。太田かほりは「海外俳句における季語 ― 白夜と花野」（文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要(6)　2007年2月）の中で「摩天楼より新緑がパセリほど」という句に触れつつ海外俳句の普及者としての鷹羽狩行を高く評価している。普及への貢献は別問題として、彼が「摩天楼より新緑がパセリほど」という句を発表した昭和44年には、梶山の第一句集『國境』の海外詠69句中59句が成立しており、皮肉なことに44年は唯一の「休止期」ですらある。筆者は海外詠のみ梶山の特徴を見出すわけではないが、単純に海外詠という点に限ってみても重要な先駆者の一人に数えるべきではあると考えられる。

4) **京都を離れることはなかった。** 前句「屠蘇を酌む」は合同句集『結』（2010年　東京四季出版刊）後句「桃啜る」は『梶山千鶴子全句集』（補註3参照）「拾遺」の「平成22年」（2010年）の項に収められている。

5) **困難である**　理論的には想像力があれば、実際にその場所を訪れなくても句作は不可能ではない。従って、吟行そのものの意味合いが問われるが、ここではおく。しかし、「観光」になぞらえて次のように考えることもできる。現地にゆかずとも、観光ガイドや観光ホームページの動画等により、実際に訪問する以上の詳細な情報こそ手に入れることが可能ではあるものの、そこに行かなければ知ることのできない「空気の澄み具合・温度・音・匂い・味」といった五感情報の入手は困難である、と。現地に行かずに書くのと訪れ観察する中で書くのとではおのずから踏み込みの違いが現れてくる。これは芸術観光学の基本的立場でもある。

6) **火田民**　火田とは、山林に火を放って林木と地表の植物を燃やした後、その跡地で耕種を行う土地利用形態のことである。世界各国における火田は、農業の近代化とともにその姿を消していった。しかし、朝鮮は、植民地期における農業構造変化により零細農民が農村に多く滞留し、その一部が火田民となった。（申畋静「解放以後の韓国における開墾事業の展開と火田民の増加 ― 1945年から1964年までを中心に ―」林業經濟63(2)，16-28，2010-05-20）

7) **改めて照射する力**　筆者は日本と韓国との「差異」に注目したが、梶山自身は『梶山千鶴子　自解150選』（2002年2月　北溟社刊）の中で「当時韓国も日本も必死のように感じた」と述懐している。

8) **排列意識**　合同句集「めろん集」の順番とは異なり、必ずしも制作時期通りではない。つまりは排列意識＝虚構意識が見られることを確認しつつ、ここでは、「生活記録」風にその虚構の枠の上で「現実」として読み進める形をとる。

9) **石垣りん「崖」**　戦争の終り、／サイパン島の崖の上から／次々に身を投げた女たち。／／美徳やら義理やら体裁やら／何やら／火だの男だのに追いつめられて。／／とばなければならないからとびこんだ。／ゆき場のないゆき場所。／／（崖はいつも女をまっさかさまにする）／／それがねえ／まだ一人も海にとどかないのだ。／十五年もたつというのに／どうしたんだろう。／あの、／女。（詩集『表札など』所収　1968年　思潮社刊）

10) **第五部「北の馬」と第七部「出雲の雪」には海外詠は存在せず**　第五部「北の馬」に現れる前書きは「大和」「吉野　二十六句」「鷹ケ峰や島原に吉野大夫をしのびて　七句」「多田先生らと琵琶湖畔の芭蕉の跡をめぐる　六句」「御室の仁和寺　三句」「新潟、佐渡　十一句」「久里浜に高橋よつ女さんを訪ふ　三句」「れもん大会の時、越前平泉寺　一句」「れもん大会の時、大野の宝慶寺にて　一句」「ノサップ岬　六句」「太秦牛祭　三句」「伊豆大島　三句」「堅田浮御堂　四句」である。また第七部「出雲の雪」の前書きは「雪の出雲　十句」「逗子　四句」「鎌倉　五句」「円覚寺　六句」「南禅寺に能面打つを見る　二句」「嵯峨、大原など　十句」「松江　九句」「佐賀　六句」「信州　一句」「女人高野　二句」「南九州　六句」「鵜匠の家　四句」「足摺　二句」「宇和島闘牛　三句」である。

A Study on Haiku of Chizuko Kajiyama : Theory and Practice Art Sightseeing Study ⑦

HIRAI, Ken

Around 1970, Japan was in the midst of rapid economic growth. It was during that period that the first collection of haiku *Country Boundary* by Chizuko Kajiyama was published. What is unique to the collection is that it included a lot of haikus written not only by people in Japan but also by those living abroad including non-native speakers of Japanese, which previously had never happened in the history of haiku.

I am appreciative to Chizuko Kajiyama for having compiled *Country Boundary* for the following three reasons. First, she was good at composing a haiku herself in a traditional style. Second, she wrote a large number of haikus abroad. And third, she was successful in incorporating them so naturally into her *Country Boundary*. I think we should pay more attention to the works of Kajiyama.